町史とっておきの話 289

只見　ぜんめえ物語④

―胞子からのぜんまい栽培に挑む―

鈴木（すずき）　克彦（かつひこ）

昭和五〇年代、只見町におけるぜんまい栽培は、山に自生しているぜんまいのカブツ(株)を掘り取って来て畑に移植するというやり方で始まりました。そして、昭和六〇年代になると栽培の先進地・叶津地区では、ぜんまい畑はもはや珍しいものではなくなっていました。しかし、こうしたぜんまい栽培は、岩場のすべりやすいところに自生しているものを唐鍬（とうぐわ）で掘り取るものですから、とても危険を伴う作業となります。細いぜんまいのカブツなら山の低いところでも採れますが、太いぜんまいのカブツともなれば高くて急勾配の山にまで出かけなければ採れません。また、みんなが山のぜんまいのカブツを大量にとってきたのでは、山が荒れてしまうと懸念の声もささやかれ、栽培に頼らず山のぜんまい採りに専念する人たちとの対立も心配されました。こうした折、今は亡き叶津の長谷部保信さん(昭和三年生まれ)は、胞子からのぜんまい栽培はできないものかと考え、昭和六一年ころから独り研究に取り組みました。この研究がうまくいけば、山に行けない人でも栽培ができるようになるし、数ヘクタールのぜんまい栽培も可能となり、只見のぜんまい栽培が新たに農業の一翼を担うことができるという希望もありました。保信さんが実践した胞子栽培の手順について、陰で研究を支えた妻のイネさん(昭和一二年生まれ)から伺った話を紹介します。

▲ゼンマイの胞子を植木鉢のミズゴケ上に蒔く長谷部保信さん(イラスト・筆者)

まず、山から大きく成長した雄ぜんまいを採って来る。風が当たると胞子は飛散してしまうので、座敷に新聞を広げ、その上に並べて陰干しする。乾燥すると抹茶を数倍細かくしたような胞子が新聞の上に落ちるのでそれを採取する。次に、ミズゴケを植木鉢に置き水を十分吸わせた後、その上から胞子を蒔く。その年の秋になるとミズゴケの上に苔のような姿を現す。二年目になると双葉のような小さな葉をつけるとともに縫物針のようなぜんまいが顔を出す。ここで鮮魚入れに使われる発泡スチロールの苗床にミズゴケを張り、そこへピンセットを使って一本ずつ丁寧に植え替える。その一年後、苗の高さは五センチから一〇センチに生長する。その苗をまばらに杉が生えるような畑に仮定植する。仮定植されたぜんまい苗は年を追うごとに勢いを増して成長する。胞子を蒔いてから四年目になると、苗の高さは三〇センチほどになり、ここでやっと畑に定植することが可能となる。当時、保信さんとイネさんは畑から田んぼ、そして、山にまでこの苗を植えたといいます。そして、定植から六年後(胞子を蒔いてから一〇年後)の春、やっと太いぜんまいが出てくる。ここで最初の収穫が行われます。

保信さんの研究は、労務管理にも及んでいます。集落周辺の平地にばかり多くのぜんまい畑を作ってしまうと、同時期に一斉にぜんまいが出る。そのため、ぜんまい採集と乾燥作業がとてもきつくなると予想し、標高別に三段階に栽培地を準備したのです。つまり、標高一〇〇メートル毎に三カ所に栽培地を分散させました。すると、収穫期間が六〇日間程度可能となり、作業にゆとりが生まれました。

研究を始めてから一〇数年が経ったころ、各地から多くの見学者が保信さんの農園を訪れて来るようになりました。しかし、胞子蒔きから一〇年間辛抱しないと収穫にはたどり着くことができないと聞くや、皆あきらめた顔をして帰って行ったとイネさんは当時の様子を振り返ります。

現在、保信さんの研究を受け継ぐ人や機関は見当たりません。でも、彼が手がけた胞子栽培によるぜんまい畑は今も現役で、春になると太いぜんまいをしっかり出してきます。